

国内研修成果報告書

『暮らし型観光』

テーマ：暮らし型観光について。社会的親の存在とまちづくりにおける役割について

研修場所：神奈川県真鶴町

研修期間：令和6年2月25日～26日

参加人数：1人

《前書き》

大学に入りまちづくりを学び、フィールドワークをする中で、観光の在り方について考えるようになった。また、多くの観光地域やローカルな地域を訪れる中で、コミュニティの大切さや、その地域ならではの伝統や教えなどの重要性を痛感した。その一方で、大規模リゾート開発や現在の観光地に多い大衆受けするまちづくりには限界を感じている。そこで、地域の魅力を伝えるような新しい観光の在り方を提唱したいと考えるようになった。

講義を受講する中で、数は少ないものの、暮らしに寄り添った観光の在り方を実現し、暮らしの延長線上で観光を実現している地域があることを知った。その方法の1つである「暮らし型観光」について実際に見聞きしたいと考え、最先端で学べる真鶴町を国内研修先に選定した。

《真鶴町について》

真鶴町は神奈川県南西部、相模湾に面した真鶴半島を中心とする町である。美しい海岸線や三ツ石などの自然景観が特徴であり、特産品には本小松石やミカンがあり、観光地としても人気がある。美しい景観、まち並みは、住民の声により定められた『美の条例』で守られている。また、近年では、まちおこしの一環として『まちあるき』という活動が行われており、町のPRとして活用されている。この活動は観光としての効果だけではなく、移住のきっかけにもつながっており住みたい田舎町に何度も取り上げられている。都市近郊と比べてローカルな地域であり、コミュニティが確立しているため、地域としての結びつきが強い傾向がある。実際に訪れ、「社会的親」の存在に触れることで、自分自身の経験に活かしたいと考え研修に向かった。

《研修内容》

真鶴出版が提供する宿泊プランに「まち歩き」を組み込んだ。紹介していただいたお店や施設に訪問し、体験や取材を行った。

《実施報告》

電車を乗り継ぎ在来線で真鶴町に昼過ぎに到着した。お昼は町内でラーメン屋と韓国料理を提供している個人店を訪問した。その後、真鶴出版にチェックインし、「まち歩き」に参加した。

真鶴出版のまちあるき案内役・ジュンコさんから真鶴町の魅力について紹介していただいた。まず、お店についてだが、大きなショッピングモールがなく昔ながらの八百屋さんやお肉屋さん、商店が残っている点が魅力だと話されていた。また、その中で生まれる人とのつながりも最大の魅力だとおっしゃっていた。「まちを歩けばご近所さん（お友達）に出会える」という点から、「不便利さを楽しむことができるまち、人とのつながりを感じるまち」と表現されていた。また、ジュンコさん自身も移住者であり、海外での生活もしたことがあるようで、「他の地域も見たことでより魅力をを感じる事ができた」と話していた。

1時間半程度の「まち歩き」では以下のお店や施設も紹介してもらった。実際に訪れそれぞれインタビューや調査も行った。

パン屋 秋日和

真鶴町への観光がきっかけで移住を視野に入れ始めたというエピソードを伺った。真鶴の人との距離感が近く温かさを感じたことが大きな魅力だったそうだ。また、川口さんという人物が住民と自分たちをつなぐ架け橋となってくれたとも話されていた。このように地域とよそ者をつなぐ案内役がまちにとって大きな影響を与えていると学んだ。

道草書店

実際に本を購入し、お茶スペースも利用した。来店者ノートには「人の優しさに触れました」「心からゆったりできる雰囲気やみつきです」といった感想が書かれており、多くの来訪者が充実感を得ている様子だった。音楽が流れ、住民も移住者もまた

観光客も一気に交流はむずかしくても一緒に時間を過ごすことでコミュニケーションのきっかけとなっていた。

****コミュニティ真鶴****

公民館的な施設で、この日は主婦数名によるバンド活動「おみかんズ」が行われていた。一緒に参加させてもらい、「人とのつながり」「景観の美しさ」が魅力だと教えていただいた。この方々も観光で訪れたことが移住につながったそう。中にはまだ移住して半年もたっていない方や、シェアハウスを営んでいる方もいらしゃった。ここで交流した方の多くが自営業を行っており、個人店を大切にする真鶴らしさが顕著に出ていると感じた。

****富士食堂****

こちらの店も個人経営の居酒屋で、店主やスタッフの方々からおすすめの商品などをご紹介いただいた。帰り際には「真鶴出版に泊まる子？」と声をかけていただき、この町ならではのコミュニティ感覚を体験した。

****草柳商店****

地元住民や市役員、漁師さんなど多様な人々が集う名店だった。ここでは真鶴町について詳しく教えていただき、多くの人々をご紹介いただいた。また酒屋ならではのコミュニケーションがあり、『友達の友達は友達』のようなフットワークの軽い交友関係があった。また、ここでは社会的親になってくださっている方々が多くおり、安心して真鶴に移住できる環境づくりが自然と行われているのだと実感した。

2 日目は以下の場所を訪れた：

****三ツ石****

早朝 5 時頃出発し山道を 1 時間ほど登った先で、美しい日の出を見ることができた。この景観は街並みと一体化しており、大きな幸福感を得られるものであった。これが『美の条例』で守っていきたかった景色か。と感動した。

****ヨットハーバー****

前日に知り合った漁師さんのお誘いでヨット陸揚げ作業も見学させていただいた。一期一会の出会いから貴重な経験につながった。

《考察》

今回訪問した施設やお店では、一貫して「真鶴はいい町だ」という声が聞かれた。近年、多くの地域では郷土愛や地元愛が希薄化し、それによって過疎化も進んでいるように感じる。しかし、この地域では住民一人ひとりが真鶴町への愛着と誇りを持っており、それが強く伝わってきた。「美の条例」を良い決まりとして受け入れ、その景色への愛着も大切にされている。同じ感性を持つ移住者も積極的に受け入れることで、この良い町づくりが守られているようにも感じた。

また、「観光から移住」というプロセスには「社会的親」の存在が大きく関与していると実感した。都市近郊よりローカルな地域ほどコミュニティとして結びつきが強く、人とのつながりによる安心感が移住希望者にも影響しているようだ。

《まとめ》

この 2 日間で「暮らし型観光」を体験した。リゾート開発や大規模開発による観光地とは異なる充実感を得ることができた。また、不思議なことに従来型観光で生じる帰宅した後の“虚無感”は一切なかった。「人とのつながり」や「温かさ」を感じることで真鶴だけでなく、自分自身の郷土にも愛着を持つことができた。そして、「まだ知らない魅力がある」と思わせるほど奥深さも感じた。またもっと多くの地を訪れてみた

いと思わせてもらった。

今回得た幸福感や価値観はまだ言語化や他地域への応用は難しいものの、新たなまちづくりへの視点や自分のなかのまちづくり観、観光に対するイメージの創造的破壊とも言える体験となった。この研修を通じて、「暮らし型観光」についてさらに深く調べたいと強く感じた。